

ぎふ

幸せ瓦版

善意の靴で笑顔の輪

アフリカ・コートジボワールの子どもたちに靴を届けようと、岐阜市のNPO法人「ぎふ・コートジボワール」のメンバーが先月、現地を訪れ、靴の引き渡し式を行った。日本では使われなくなった靴を集め、現地に送る活動を続けて3年。杉山利夫理事長は「現地の人に非常に喜んでもらえた」と手応えを語る。

コートジボワールを訪問したのは、杉山理事長、可児邦夫副理事長、通訳を兼ねる在日コートジボワール人のカク・ブル・シヨージさんの3人。先月10日から19日の日程で、グランラウ市とアティエゴアクロ村を訪れ、日本から海路で輸送中の靴6千足の引き渡し式に臨んだ。

3人は、11日に最大都市のアビジャン市に到着。靴の輸送が式までに間に合わないトラブルもあったが、14日に持参した靴3足をグランラウ市の市長に手渡した。その後、15日にアティエゴアクロ村に移動し、引き渡し式を行った。またボールペンや鉛筆、ノートなどの文具も一緒に届けた。

杉山理事長によると、式には現地の子どもが大勢集ま

NPO法人「ぎふ・コートジボワール」 岐阜市



日本で集めた靴の引き渡し式に臨む杉山利夫理事長（中央）
＝コートジボワール・グランラウ市（同法人提供）

中の靴はアビジャン市まで到着しており、届き次第、現地から報告を受ける予定。

一方、現地の支援と同時に「日本でも、物の大切さを忘れないようにしてほしい」と思いを込める。現地の都市部は靴のある生活をしているが、村に入ると、靴のないだしの子どもたちが多いという。杉山理事長は「たった6千足の靴で賄えるのは一部の子どもたちだが、言い出したら足りない。少しの力で国際貢献できるんだと日本で知ってもらいたい」と訴える。

現在は、県内の高校7校の卒業生を中心に使用済みの運動靴を集めているが、今後は現地訪問の報告会を通して、国際貢献の意義や現地の子どもたちの様子を伝える方針。

「ただ単に靴を集めるのではなく、集めてくれる人が自身の生活を見直す機会にしてほしい」と語る。（河合修）

はだしの子どもらに届ける

り、市長や村長から「遠い日 くれてありがたい」などとお本からわが国のことを思って 礼を伝えられたという。輸送

海路でコートジボワールまで靴を送るのに1回約35万円。集まる靴は多いほどいいと思っていたが、輸送費にも限界はある。自己負担が大き過ぎるようでは支援は長続きしない。「ただ単に靴を

記者の ひとこと

集めるのではなく、どう思っ
て集めるかが大切」と杉山利夫
理事長。
靴を集める活動を通して、少
しも自身の生活を考えるきっ
かけにしてほしい。